京極読書新聞 ＜第33号＞

発行日　平成24年 5月　1日（火）
京極町生涯学習センター湧学館

京中生にインタビュー 2012 第１回

今年も「京中生にインタビュー」の春がやってきました。いつもこの季節が来るのを楽しみに待っています。＜編集部＞

細川千遥さん（2年生）「星守る犬」
菅原彩乃さん（3年生）「ホームレス中学生」
櫻仁美さん（湧学館）「六番目の小夜子」

———今回は、四月から湧学館図書に勤務している櫻仁美さんにも加わってもらいます。

櫻　櫻です。京中卒で旧校舎の図書室に日参していた身としては新校舎がとにかく真新しいです。

———これで、旧校舎の二階の図書室を知る人、仮設校舎時代を知る人、入学した時からもうこの新校舎の図書室が当たり前だった人と、三世代が揃いましたね。

櫻　とても明るくモダンな佇まいで驚きました。うらやましい限りです。それでは早速インタビューへ参りましょう。

———「ホームレス中学生」、初めて、最初から最後まできっちりと読みました。テレビなんかで話題になった「ダンボールを食べた」なんてこと、じつは、どうでもいいような些細なことだったんですね。まじめな、人間の成長ドラマだと感じました。

菅原　この本を読むきっかけは、「ホームレス？」「家がない中学生？」というタイトルの奇抜さです。どういうこと？って思いました。

———で、いきなり、あの「解散！」のお父さんですもんね。

菅原　借金で自分たちの家が差し押さえられてしまった時、子どもたちに向かって「これからは各々頑張って生きて下さい。……解散！！」なのですからびっくりしてしまいます。私なら絶対に拒否です。

———主人公の田村裕が、意外とすんなり「家がなくなった」→「ホームレス中学生」へと移って行くのが少し不思議でした。

菅原　私なら、友だちにわけを話して泊めてもらうと思います。恥ずかしいとか、馬鹿にされるとかあったとしても、泊まるところの確保の方が大事ですから。逆に、自分の子どもにそういう友だちがいたなら、私なら泊めてあげていたと思います。困っているんだから、最低限のことはしてあげたい。裕の友だちの川井よしやのお母さんのように。

———細川さんが読んだのは映画ノベライズの方の「星守る犬」ですか？

細川　そうです。私は動物が大好きなので本棚は動物の本でいっぱいです。その中でも、この「星守る犬」は、切なさに涙あふれる大切な一冊です。

細川　犬が二匹、猫が二匹。耳そうじをしたり、爪を切ったり、たまにカットをしたり。カットが上手くいった時はすごくうれしくて、写真を撮ったりします。

———どちらの本のお父さんもなかなか強烈で。でも、私も現実にお父さんなので、どうしても二人の「お父さん」にも目が行ってしまいます。

細川　あまり「お父さん」は意識しませんでした。犬の可愛さ、人間に対するひたむきさがすべてだったような気がします。

菅原　私も、ホームレス中学生・田村裕のこれからの人生がどうなって行くのかが心配で本を読みました。

京極読書新聞は
毎月１日発行です。

2ページ目に続きます

―――二人のお父さんと自分との間には、人生の歯車のちょっとしたかけ違いしかないんだなぁ…と改めて思いました。けっこう身につまされる本でした。

櫻　最近読んでおもしろかった本とか、ありますか？

細川　私は、「うさぎパン」という本が 白かったです。

菅原　私は韓流ドラマが大好きなので、そのノベライズ本とか原作本をいっぱい読んでいます。

櫻　普段からよく本を読まれると いうお二人には感服します。先日中学生時代に読んだ「六番目の小夜子」という本を読み直しました。今はなき旧校舎の図書館で過ごした日々が懐かしいです。

新人からの挨拶

インタビューにも登場させていただきましたが、この場を借りて改めてご挨拶申し上げます。今年の4月から湧学館に勤務しております櫻仁美です。京極町出身者として、京極町で働けることはとても誇らしく、嬉しい気持ちでいっぱいです。まだまだ未熟で、皆様にご迷惑をかけることもあると思いますが、精一杯尽力してまいりますので、よろしくお願いいたします。　（櫻）

西村元太くん（1年生）「その時ぼくはパールハーバーにいた」
船場菜南子さん（1年生）「捕虜になるまで」

―――中学校の生活、どうですか？

西村　だいぶん慣れてきたところです。

―――「その時ぼくはパールハーバーにいた」を南京極小学校からお借りして今読んでいるところです。いやー、けっこう活字がつまったかっちりした本ですね。小学校6年（受賞時）ということを考えると、二人とも頑張ったねえ。

西村　読書感想文に予定していた本はもう一冊あったのですが、こちらの本の方が「戦争」というものの正体がリアルに描かれているように感じ、「その時ぼくは―」を選びました。

船場　これまでも様々な戦争の体験談を聞いてきましたが、沖縄の地上戦についてはあまり知りませんでした。「捕虜になるまで」は、地上戦を体験した人たちが「戦争」というものを絵と文でしっかりと表していました。

―――「その時ぼくは―」は、日米開戦のきっかけとなった日本軍・真珠湾攻撃の時の日系三世の少年を主人公に持ってきていますね。

西村　奇襲攻撃という卑怯な作戦は、ハワイに住んでいた日本人・日系人たちを苦しめることになります。主人公・トミカズは大切に育てていたレース用鳩を「日本に伝言を送った」との理不尽な理由で殺すことを命じられます。漁師をやっていたお父さんは「潜水艦に燃料を送った」といういわれない罪で逮捕されてしまいます。ひどい話です。

―――私は、日本人のグランパ（祖父）、日系二世のお父さん、三世のトミカズの、それぞれの日本やアメリカに対する感情のちがいが興味深かったです。

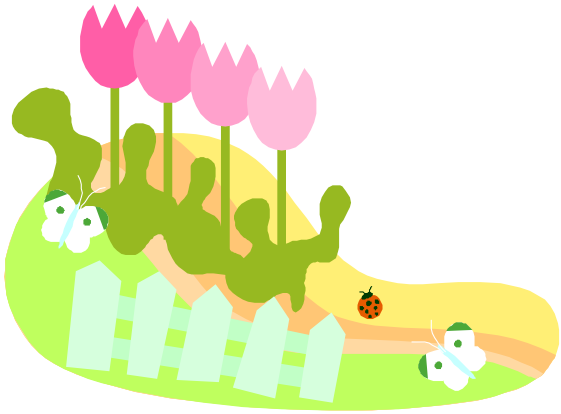
西村　自由を奪い、名誉を汚す差別に、トミカズがくじけなかった理由のひとつに、友達・白人の少年ビリーの存在があると思います。戦争中だろうと、平和な今の世の中だろうと、人間として守らなければならないものがあるのだと思いました。

―――船場さんも、感想文の中で、「私達には守らなくてはいけないものがある」と書いていますね。

船場　「捕虜になるまで」の中で、米軍から逃げて行く途中、弾丸（たま）にあたって傷ついた友達を次々と見捨てて行かなければならなかったことが書かれています。海岸づたいに逃げていたハルさんの友達が溺れかかった時にも、助けもしないでその光景を眺めていた日本兵とか。人の事が考えられない…自分の事しか考えられなくまで人間を追いつめる「戦争」というものの恐ろしさを考えさせられました。

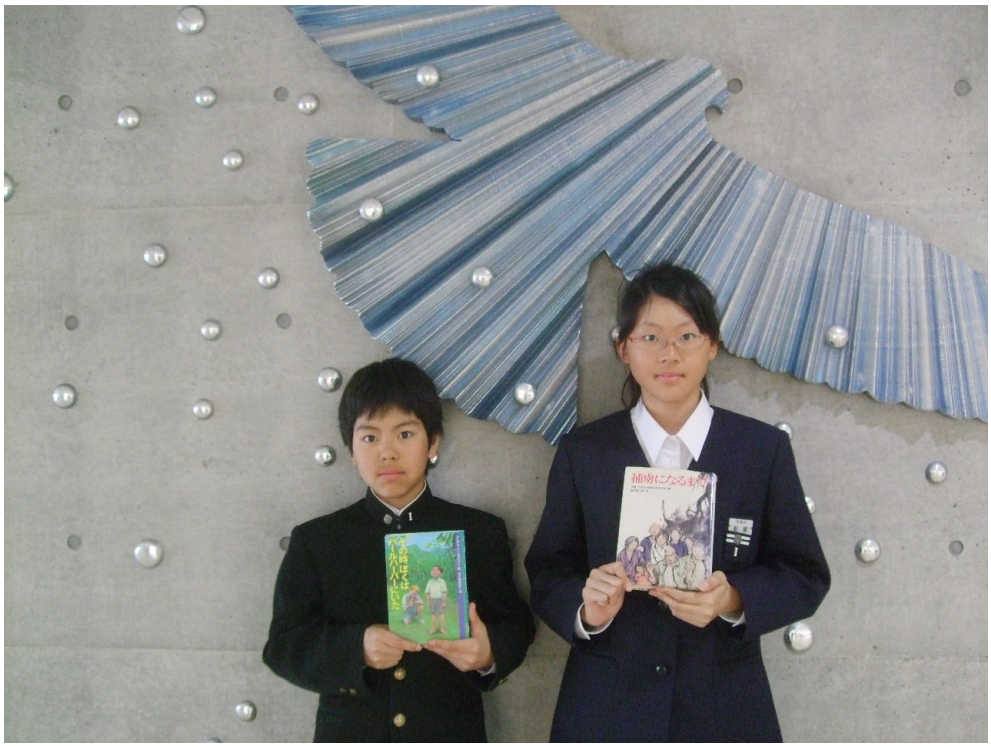
―――この話の中に救いがあるとしたら、隠れていた岩穴で、ハルさんたちに「女学生さん、死ぬのは早いよ。生きておきなさい。敵は噂のように殺しはしないよ」と言ってくれた日本軍少尉でしょうか。読んでいて、ああこの人、学徒動員で沖縄に配属された学生将校だなとすぐにわかりました。

船場　この体験記は、戦争中でも、戦後の貧しい生活の中でも、人間には守らなければならないものがあることを教えてくれます。家族や友情や人々の尊い命をみんなで守って行くことが、戦争のない平和な世の中をつくる道なのだと伝えてくれました。



京中生に
インタビュー
2012
第1回

「星守る犬」 蒔田洋介著／双葉社
「ホームレス中学生」 田村裕著／ワニブックス



「その時ぼくはパールハーバーにいた」
グレアム・ソールズベリー著／徳間書店
「捕虜になるまで」 沖縄・こどもと教師の文学の会編／ポプラ社

余談「平清盛」（4）

＜『平家物語』を読む会＞　講師　村山　功一（むらやま･こういち）

「ドラマ･清盛」は、相変わらず粗暴でむさくるしい清盛が登場し続けていますが、そろそろ身ぎれいになってほしいものです。第**14**回（**4/8**放映）の舞台は久安**3**（**1147**）年で、史実での清盛は**30**歳。前年**2**月には正四位下という高位に叙せられています。もう“無頼の平太”を卒業してもいい頃ではないでしょうか。

さて、今回の余談はドラマを少し離れて、清盛の“美意識”について考えたいと思います。

ドラマの、あの清盛からは想像しにくいが、実は清盛はたいそうオシャレです。全盛期の平家一門は、都におけるファッションリーダーでした。その様子は〈衣文のかきやう、烏帽子のためやうよりはじめて、何事も六波羅様といひて（ン）げれば、一天四海の人、皆是をまなぶ〉（『平家』巻一「禿髪」）と描かれています。要するに、六波羅（平家一門）風のファッションをみんなが真似したというのです。当然、その六波羅ファッションには、清盛のセンスが反映されていると思われます。

清盛といえば、黄金に輝く千一体の仏像をおさめた得長寿院（三十三間堂）の造営や、鮮やかな朱色の巨大な鳥居と、神社建築様式の常識を破った“寝殿造り”による壮麗な厳島神社の建設、そしてその厳島神社に奉納した善美を極める平家納経……といった、彩り豊かな華麗さ、派手さのイメージが強いようです。

ところが、〈清盛、この日の装束には、飾磨の褐の直垂に、黒糸縅の鎧……下より上までおとなしやかに、真黒にこそ装束たれ。冑ばかりは、銀をもって大鍬形をうちたりければ、白く輝きて……〉と『平治物語』は描きます。“褐”は黒に近い濃紺色です。長いので省略しましたが、馬も鞍も弓も太刀の造りまですべて黒一色です。そして冑（かぶと）の金物だけが銀色に輝く。どうです、抜群のファッションセンスではないでしょうか。今でも“黒を着こなす”“黒が似合う“ということは、オシャレの基本であり真髄でもあると思います。もちろんこの黒づくめの装束は、彼我の戦場心理をも十分計算してのいでたちでもあるのです。ドラマでは清盛に赤い弓（平家の旗の色を象徴してとのこと）を持たせるということですが、止めたほうがいいでしょう。清盛の魅力が半減します。

清盛の鋭く繊細な美意識は、ファッションだけではありません。

後年、清盛は西八条（現京都駅付近）に広大な屋敷を構えます。その豪邸の庭いっぱいに、蓬（よもぎ）を植えました。野草である蓬で庭園を埋め尽くし、“蓬が壺”と名付ける発想は、やはり当時の常識を超えてオシャレです。“蓬”や“蓬が原”は荒涼とした風情の象徴です。繁華な都の一角に荒涼とした蓬が原を作りだす美意識は、はるか後年盛んになる“侘び”“寂（さび）”という美的理念に通じるものがあります。

黒に銀を配することで、あるいは、きらびやかな屋敷の庭に野草の原を配することで結局は優雅さ、華やかさが際立つ、という繊細で洗練された美意識が感じられます。華美と質素、派手と地味、雅びと鄙（ひな）……清盛はこの両極のギャップを巧みに融合させる絶妙なバランス感覚を備えた人物だったといえるのではないでしょうか。このバランス感覚が、わが国の歴史を古代から中世へと推進する清盛の原動力になったものと思います。

ところで、余談の“余談”ですが、“蓬が洞（ほら）”とは上皇（法皇）の御所を指します。ひょっとすると清盛は、自らの邸宅に実際に“蓬が壺”を現出させることで、後白河法皇への対抗意識を燃やしたのではないか、という妄想に駆り立てられます。

いずれにせよ、清盛とは一筋縄ではいかない、しかしきわめて魅力的な人物なのです。　〔以下次号〕

［参考図書］ ＊印は湧学館所蔵
今まで掲げた参考図書と重複するものは除く

・『平清盛―「武家の世」を切り開いた政治家』
（上杉和彦/著･山川出版社）
＊『厳島神社と平家納経』（日下力/監修･青春出版社）

発行

京極町生涯学習センター湧学館
〒044-0101　京町字京極158番地1
TEL 0136-42-2700（代表）
FAX 0136-42-2032
E-Mail　yugakukan@town-kyogoku.jp

ホームページもご覧ください
http://lib-kyogoku.cubet.com/